

巻頭言**へき地における高度医療は可能か**

病院長 棚橋 忍

高山赤十字病院紀要第38号を発刊いたします。病院が発行するジャーナルは病院の医療の質を問うものです。また若い医師、医療スタッフの論文作成の訓練の場と考えています。その点から見ると、今回は研修医・若手医師の原著論文がなく寂しい感じがします。他方、他の医療スタッフの論文が投稿されており、紀要が幅広い人材育成に寄与するものと期待しています。今年度は病院年報も発刊できましたので共に充実させていきたいと思えます。

昨今少子高齢化の議論が盛んですが、当院が位置する飛騨医療圏は約10年前より人口減少の先進地域です。高山市も現在92,000人を切って人口減少が続いています。当院がより良い医療を住民の皆さんに提供するとの立場からすると大きな問題です。すなわち住民の減少は経験する症例数が減少することであり、医療レベルの維持にとって問題となります。経営的にみると患者減は収益に影響し、今後の人材、機器の投入への原資を賄えなくなることが懸念されます。

医療の提供体制から見ると、人口が減少すれば医療が少なくてもいいかは単純ではありません。たとえば人口が減少すれば出産が減少しますがゼロにはなりません。また、心筋梗塞になる患者さんも減少するかもしれませんが、ゼロにはなりません、住民が減少したからといって、リスクのある出産に対応する産婦人科、未熟児センターは必要です。急性心筋梗塞に対応できる心カテの高度機器、医師は必要です。一方、効率性からみてニーズが少ない（すくなる）地域にどの程度の人を配置し高度機器を備える事ができるか問題になります。

人口減があってもある一定のレベルを維持した病院機能は必要です。今後レベルを維持した医療を効率性とバランスをとりながら行っていくことが必要です。昨年より病床機能報告制度が始まりました。今後県は地域の医療機能をどのように策定するか検討し、医療ビジョンを作成することになっております。飛騨地域で高度医療は必要と考えており、医療ビジョンの策定に意見を言っていきたい。